

世界中にはたくさんの宗教があります。「旧約聖書」をベースとしたイスラム教・ユダヤ教・キリスト教以外の宗教では、何かの物質を拝むということは、ごく当たり前のこととしておこなわれています。たとえば大仏に手をあわせたり、神棚に向かって手を叩いたりといった具合にです。

ところが旧約聖書では、偶像礼拝を厳しく禁止しています。偶像とは木や金、銀、石などにつくられたもので、表面を彫ったり、金属を型に流し込んでつくったりします。それらのものを拝むことを、十戒をはじめ様々な法で禁止しているのです。

ではなぜ、旧約聖書ではそれほどまでに偶像礼拝を否定したのでしょうか。そもそも偶像は、人間の手で作られたものです。そのようなものの中に、神さまが入ってしまうのでしょうか。また神さまという存在を、人間の技術で表現することなどできるのでしょうか。

そのような理由で、「人の手でつくられた像」を神さまとして、拝んではならないと言われているのです。しかしわたしたちは、部屋に十字架をかざり、そこに目を向けてお祈りすることもあると思います。

その行為は、偶像礼拝ではありません。その十字架そのものを神さまとみなしてしまったら問題がありますが、十字架を通して神さまを思い起こし、お祈りするならば、大丈夫です。

新約聖書の中にも、偶像という言葉が出てきます。その中にこのような言葉があります。「貪欲は偶像礼拝に等しい」。他の人のことを顧みずに自分のことばかり考えることも、偶像礼拝なのです。自分という偶像から離れて、神さまに立ち返るようと、聖書は伝えているのです。

今回は「寓喩」です。お楽しみに。



「金の子牛の崇拜」

ニコラ・プッサン

1594～1665年

子たちよ、偶像を避けなさい。

(ヨハネの手紙一 5章21節)

